



孫が可愛い

新潟市民病院

橋立英樹

昨年4月、初孫が生まれました。長女の第一子で、元気な男の子です。長女は里帰り出産しなかったのですが、産休の間母子ともかなり長くわが家で過ごしており、自分が孫と直接かかわることが多いのですが、とにかく孫が可愛いのです。人からよく孫は可愛いとは聞いてはいましたが、想像していた以上に可愛く愛おしく感じてしまいます。目の中に入れても痛くないという表現がありますが、例えば抱いている孫が不意に手を挙げて、孫の指が目の中に入ったとしても、怒りの気持ちなどはみじんも無く、全然許してしまいます。経済観念もガバガバになってしまっていて、財布の紐も緩みっぱなしで、孫のためなら金に糸目はつけずに衝動買いしてしまっています。単純には比較は出来ないとは思いますが、実子よりも可愛いと感じてしまいます。

リチャード・ドーキンスが提唱した利己的遺伝子説というのがあります。自分の遺伝子をより濃く受け継ぐものをより大切に思うという仮説であり、その説によれば、実子は自分の遺伝子を二分の一受け継ぐもの、孫は遺伝子を四分の一受け継ぐものとなります。そのセオリーに従えば、遺伝子をより濃く引き継いでいる子の方が可愛いというのが本来のようですが、実際は孫の方が可愛いのです。

一般的に、孫が可愛い理由としては、責任からの解放があると言われたりします。子育て中は、親としての責任感やプレッシャーが大きく、常に緊張状態にあります。一方、孫に対しては、育てる責任から解放され、純粋に可愛がることができます。時間の余裕があるというのもあります。子育て中は忙しく、自分の時間がなかなか取れません。孫には、ゆったりとした気持ちで寄り添い、

たっぷり愛情を注ぐことができます。また、孫については「もう一つの家族」という感覚が生まれることもあります。そのため、自分の欲求を満たすためでなく、ただただその存在を愛おしく感じられるのかもしれませんが、しかし、そのような理由を差し引いたとしても断然孫の方が可愛いです。孫の方が子よりも可愛いというのは、きっと何らかの医学的な理由があるのではないかと調べてみました。

調べていくと、面白い学説に行き当たりました。それは「おばあさん仮説」というものです。この仮説によると、女性が閉経後も長生きすることは、限られた食料や居住空間を狭めることになるわけで、生存戦略上、一見不利に思えます。しかし、おばあさん、つまり閉経後の女性が孫の養育を手伝うことで、子孫の生存率を高め、結果的に自身の遺伝子を後世に残すことに貢献するのだと説明されます。

おばあさん仮説は、霊長類の育児でも説明されています。チンパンジーの授乳期間は4～5年で、子が乳離れをするまで母親が世話をします。その間、子が母親から1メートル以上離れることは少ないらしいのです。これでは母親が1人で面倒をみることはできるのは、子1人が限界です。だから、その間は次の子は作らない。このように出産間隔が長いのはチンパンジーだけではなく、オランウータンなど他の大型類人猿にもみられる傾向だそうです。ヒトでも実際母親が1人で複数の子の世話をすることはとても難しいです。そこで血縁者が、とくに子育ての経験のある母親の母親が、育児に参加するようになった。そのために、人間の女性は閉経して子を産めなくなったあとも、健康で長く生き続けるように進化した。つまり、お

ばあさんになれるように、長生きできるように進化した。これが「おばあさん仮説」です。

ホルモンによる影響も考えられています。別名「愛情ホルモン」とも呼ばれるオキシトシンは、母性本能にもっとも重要なホルモンになります。オキシトシンは母子の絆だけでなく、共感や信頼といった社会的な行動にも関連しています。孫と接することで、祖父母の体内でオキシトシンが分泌され、強い愛情や幸福感を感じる事が示唆されています。また、孫と触れ合うことで、祖父母のいわゆるストレスホルモンが減少し、心身の健康にも良い影響を与えるという研究結果もあるようです。これは、孫の存在が祖父母にとって心の安定剤のような役割を果たすことを示唆してい

ます。

おばあさん仮説と愛情ホルモンのオキシトシンについては、なるほどと思いましたが、これらは主に祖母つまり女性の存在意義についての説明であって、男性（祖父）についてはほとんど説明になっていません。男性が女性よりも短命なのは、孫を育てる上で男性が役に立たないためなのかとも邪推してしまいます。孫育てにはあまり役に立たない爺が、孫が可愛いというのは、生物学的・医学的にどういうことなのか。爺の孫育て上の役割とは何なのか、医学論文や文献を調べてもよく分かりませんでした。まあ、理由はどうあれ、孫は無条件で可愛いのです。